長畑遺跡

－福岡県飯塚市大字潤野所在遺跡の第２次調査－

福岡県文化財調査報告書　第223集

２００９

福岡県教育委員会

長畑遺跡

（ながはた）

－福岡県飯塚市大字潤野所在遺跡の第２次調査－

福岡県文化財調査報告書　第223集

1．長畑遺跡遠景（東から）

2．1号竪穴住居跡（北西から）

序

福岡県教育委員会では、潤野・小正調節池建設に伴い、飯塚市大字潤野に所在する長畑遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では弥生時代、古墳時代および奈良時代の集落跡が見つかり、遺跡は所在する丘陵上に豊富な内容で広がっていることを推し量ることができました。調査事例の豊富ではない埋蔵文化財包蔵地内においても地域の文化財の存在を強く認識するとともに、当時の歴史を復原する上で重要な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成に当たり、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただき、厚く感謝いたします。

平成21年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　森山良一

例　言

1．本書は、潤野調節池建設事業に伴い、平成19年度に福岡県教育委員会が実施した、長畑（ながはた）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．1980年の福岡県教育委員会発行の遺跡分布地図上において、本遺跡の所在する文化財包蔵地は「杉ノ木遺跡」としており、調査時の図面類や整理した遺物の注記、各種行政文書にはこの名称を用いた。飯塚市教育委員会が近接地での調査成果を『長畑遺跡』として報告書を刊行しており、第２次調査として本報告でも『長畑遺跡』の名称を用いることとする。

3．発掘調査及び報告書作成は、福岡県土木部河川課（現、県土整備部）の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。

4．本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は（株）東亜航空技研に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。

5．本書に掲載した遺構図の作成は、調査担当者が行った。

6．出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也の指導の下に実施した。

7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館・福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所において保管している。

8．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「飯塚」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標Ⅱ系による座標北である。

9．本書の執筆・編集は坂元雄紀が行った。

本文目次

頁
Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査・整理の関係者 …… 2
Ⅱ　位置と環境 …… 3
Ⅲ　調査の内容 …… 8
　1　遺跡の概要 …… 8
　2　竪穴住居跡 …… 8
　3　掘立柱建物跡 …… 12
　4　土坑 …… 14
　5　その他の出土土器 …… 15
Ⅳ　おわりに …… 17

図版目次

巻頭図版　1．長畑遺跡遠景（東から）
　　2．1号竪穴住居跡（北西から）
図版1　1．長畑遺跡遠景（東から）
　　2．調査区全景（上空から）
図版2　1．1号竪穴住居跡（北西から）
　　2．1・2号掘立柱建物跡（北東から）
　　3．1号土坑（北から）
図版3　1．2号土坑（北から）
　　2．3号土坑（南から）
　　3．3号土坑土層（北から）
図版4　出土土器

挿図目次

		頁
第１図	長畑遺跡の位置	3
第２図	周辺遺跡分布図（1／25,000）	4
第３図	調査区周辺地形図（1／5,000）	7
第４図	調査区遺構配置図（１／150）	9
第５図	1号竪穴住居跡実測図（１／60）	11
第６図	1号掘立柱建物跡実測図（１／60）	11
第７図	2・3号掘立柱建物跡実測図（１／60）	12
第８図	竪穴住居跡、掘立柱建物跡および土坑出土土器実測図（1～7は1／3、他は1／4）	13
第９図	1～3号土坑実測図（１／30）	14
第10図	その他の出土土器実測図（1～21は1／4、他は1／3）	16

Ⅰ．はじめに

1）調査に至る経緯

飯塚市と穂波町の住宅街を流れる明星寺川（徳前川）では、平成13年度の大規模な浸水被害をはじめ、過去にも頻繁に浸水被害が発生していた。これは宅地開発が進んでいること、明星寺川が流せる水の量が不足していること、排水機場の能力不足が指摘された。これらを解消し、浸水被害を軽減する為に、明星川床上浸水対策特別緊急事業として飯塚市潤野および飯塚市小正にまたがる調節池建設計画が、この遺跡の調査の契機である。建設に先立ち、埋蔵文化財の取り扱いについて福岡県土木部河川課より照会があった。一部が周知の文化財包蔵地内で、他地点も近接していることから、確認調査を実施した。低地部の潤野内で平成19年5月18日に、小正内で平成19年5月22日に実施した調査では文化財は確認されなかった。平成19年8月6日に実施した調査では、丘陵上の文化財包蔵地の東端部において遺跡が確認されたため、工事着工前に本発掘調査を実施することとなった。

調査地点から東側開発用地を望む

2）調査の経過

発掘調査の実施に当たっては、平成19年9月17日に現地において飯塚土木事務所担当者と協議を行い、併せて地元において作業員の募集も行った。10月4日にバックホーを搬入して表土掘削を開始したが、当初予測されたよりも遺構が濃密であったため、再度作業員の追加募集を行った。同月12日より発掘機材等を搬入し、作業員による人力掘削を開始した。調査区北側から南側へ向けて遺構の検出・掘削を進めていった。削平を受けていることもあり、極端に深い遺構もなく、ほとんどの遺構がピットであったため、作業員の多くが初心者であったが、順調に作業を進めることができた。10月後半には竪穴住居跡の掘削も終了し、天候にも恵まれ10月30日には空中撮影を行った。11月2日には図化作業、写真撮影が終了し、11月５日には機材撤収も行い、予定通りに全ての作業を終了することができた。

重機による表土掘削状況

3）調査・整理関係者

平成19年度の発掘調査関係者及び平成20年度の整理作業関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

	平成19年度	平成20年度
総括		
教育長	森山 良一	森山 良一
教育次長	楢崎 洋二郎	楢崎 洋二郎
総務部長	大島 和寛	荒巻 俊彦
文化財保護課長	磯村 幸男（本副理事）	磯村 幸男（本副理事）
副課長	佐々木 隆彦	池邉 元明
参事	新原 正典	新原 正典
課長補佐	中薗 宏（本参事）	前原 俊史
課長技術補佐	小池 史哲（本参事）	小池 史哲（本参事）
	池邉 元明（本参事）	伊崎 俊秋（本参事）
庶務		
管理係長	井手 優二	富永 育夫
同主任主事	渕上 大輔	近藤 一崇
	柏村 正央	小宮 辰之
同主事	野田 雅	野田 雅
調査・報告書作成		
調査第一係長	小田 和利	小田 和利
主任技師	坂元 雄紀（調査第二係）	坂元 雄紀（調査第一係）
整理担当		
参事補佐	濱田 信也	濱田 信也

Ⅱ．位置と環境

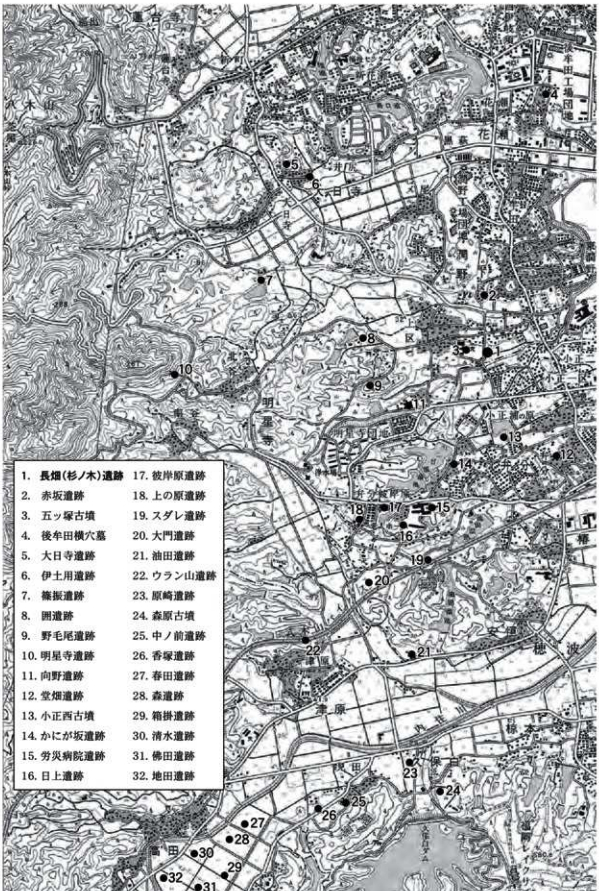
長畑遺跡の本調査地点は飯塚市の西方にあたり、福岡県飯塚市大字潤野243－1に所在する。西方の筑紫平野との境となる三郡山地を眼前に望む位置で、嘉穂盆地の西端付近となっている。また、嘉穂盆地の南は古処山地を境として朝倉郡と接し、西側は金国・戸谷ヶ岳山地を境に田川郡と接している。盆地内には県内第2位の一級河川である遠賀川が北流し、飯塚市内では嘉麻川と穂波川と合流し、さらに下流では彦山川や犬鳴川とも合流する。このように遠賀川とその支流による開析、沖積作用により形成された盆地内には、複雑な支流の流れにより大小様々な盆地、低丘陵が各所に見られる。長畑遺跡もそのような地形の一部の中にあり、穂波川の支流である明星寺川と姿川に挟まれた丘陵上に位置している。

第１図　長畑遺跡の位置

また、20数枚に及ぶ石炭層を挟有する第三紀層の地域であり、この分布域を筑豊炭田と呼称している。これは明治以降に隆盛を誇った産炭産業の礎となるもので、日本の近代化に大きく貢献したが、エネルギー革命以降は衰退することとなる。近年では基幹産業の再編を基軸に方向転換を図り、また平成18年3月26日に旧飯塚市、穂波町、筑穂町、庄内町、頴田町の1市4町の合併も行われ、面積214.13km²、人口13万人の新飯塚市が誕生、筑豊の中核都市として目下発展の途上にある。

長畑遺跡の位置する嘉穂盆地西部の丘陵上は、弥生時代の遺跡が多く分布することで知られるが、それ以前の縄文後・晩期の遺跡が沖積部の微高地上に分布しており、高田所在の春田遺跡、北古賀所在の北古賀遺跡、長尾所在の木下遺跡等が知られる。

弥生時代には遺跡数が激増し、特に丘陵上への進出が顕著となる。本調査地点の隣接する長畑遺跡1次調査では、前期末から中期前半にかけての土坑、溝や多数のピットが検出されている。近隣の彼岸原台地は弥生時代の遺跡の集中することで著名である。上の原遺跡では、前期後半から中期前半にかけての多数の円形貯蔵穴や中期の円形竪穴住居跡とともに隅丸方形の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。時期をほぼ同じくする竪穴住居跡、貯蔵穴、木管墓が検出された日上遺跡、前期の土器や玄武岩製の石斧が採集された堂畑遺跡、病院宿舎建設の際に前期の壺等が出土した公舎遺跡、病院建設の際に住居跡の確認された労災病院遺跡などがある。近年調査された彼岸原遺跡では、前期後半の貯蔵穴の他に中期後半の小さい時期幅の中で円形の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝がまとまって検出され、該期の集落を検討す



第２図　周辺遺跡分布図（1／25,000）

るための好例となった。また、彼岸原遺跡の南側に隣接する丘陵上のスダレ遺跡では前期後半から中期の円形の竪穴住居跡、木棺墓、土壙墓、甕棺墓群などが検出され、特に子持ち壺や石剣切先の嵌入した人骨の出土した甕棺墓は著名である。その他近接する遺跡として、ウラン山遺跡では前期後半から中期初頭の円形の竪穴住居跡、貯蔵穴、土壙墓、石蓋土壙墓が、大門遺跡でも前期末から中期初頭の円形の竪穴住居跡、貯蔵穴が検出された。以上のような集落の様相から、前期後半に多くの集落が丘陵上に数多く展開していったと考えられる。それらの集落の継続性は、一度中期前半頃に途絶えており、彼岸原遺跡のようにやや位置を変えての展開が想定される。その後後期の遺跡はわずかに大門遺跡で見られる程度に激減している。

その一方で、近年実施された圃場整備に伴う発掘調査で沖積部の微高地上の遺跡も見つかっている。高田所在の森遺跡や箱掛遺跡、清水遺跡、佛田遺跡、原崎遺跡では前期後半から中期にかけての竪穴住居跡や土坑が検出されている。向田遺跡では、中期から後期にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等が検出されているほか、後期後半から古墳時代初頭にかけての箱式石棺墓28基、石蓋土壙墓5基といった墳墓も検出された。それらからは、「長宜孫氏」銘内行花文鏡や管玉、鉄剣、素環頭刀子、鉄鏃が出土した。

嘉穂盆地を代表する弥生時代の遺跡は、立岩遺跡およびその周辺の遺跡である。下ノ方遺跡や焼ノ正遺跡は石包丁の製作址とされ、石包丁の集約的生産と流通の面から北部九州弥生社会像の検討材料となった学史上著名である。甕棺墓群である立岩堀田遺跡からは前漢鏡10面をはじめ豊富な内容の副葬品が出土した。青銅器鋳型や鉄加工遺構の出土地点もあり、魏志倭人伝にある【不弥国】を当遺跡一帯に比定する説もある。

古墳時代には、近隣では長畑遺跡の第1次調査で前期の竪穴住居跡の一部が検出されており、スダレ遺跡では古墳時代初頭の掘立柱建物や5世紀前半の竪穴住居跡が検出された。森遺跡、香塚遺跡では前期のベッド状遺構を伴う竪穴住居跡が検出されている。香塚遺跡例は住居外に一定の間隔を空けて溝が巡る希有なものである。前期では三角縁波文帯三神三獣鏡が出土した円墳である忠隈所在の忠隈古墳が周辺で著名である。また、6世紀前半頃の前方後円墳と考えられる枝国所在の山ノ神古墳からは「王氏作」銘盤龍鏡、画文帯神獣鏡が出土し、同じく6世紀前半頃の小正所在の小正西古墳は円筒埴輪列や形象埴輪を伴う直径約30mの大型の円墳である。これらが、近隣地域において形成された首長層の展開を窺わせるものである。後期に小型の円墳が造営されていく中で、上の原遺跡、ウラン山遺跡、箱掛遺跡、向田遺跡においてそのような横穴式石室を主体とする墳墓が見つかっている。本調査区の隣接地では、北隣の丘陵上に方形周溝墓、円墳、土壙墓と前期の墳墓がまとまった赤坂遺跡が所在する。調査区西隣の潤野小学校内には五ッ塚古墳が存在したようであるが、消滅しており詳細は不明である。

文献資料においては『日本書紀』安閑天皇2年（535）条に筑紫国造磐井の乱後の措置として鎌、穂波の両屯倉の記載がある。また、延喜5年（905）『観世音寺流記資財帳』に「筑前長尾荘」と記載されており、この嘉穂地方一帯が肥沃な穀倉地帯であったことが窺える。また、古代には米の山峠を経て大宰府と豊前を結ぶ官道が整備されており、交通上重要なルートであり、高田の付近に「伏見駅」が所在したと推定されている。その沿線に位置している大分八幡宮は亀神3年（726）の創建で、平安初期には宇佐宮の五所別宮の第一に数えられ、やがては福岡市筥崎八幡宮へ遷されたと伝えられる。国指定史跡大分廃寺塔跡は現在の大分八幡宮から東

へ約1ｋｍの位置で、17個の塔礎石を完存し三重塔と推定される。新羅系の整美な古瓦を出土することで古くから知られており、発掘調査の結果、法起寺式の伽藍配置と推定され、7世紀後半から8世紀初頭の創建と考えられる。
また、龍王山から東に延びる丘陵上に、平安時代の創建と推定される明星寺が所在する。現在は新しく再建された本堂等がわずかに残るのみであるが、中世には大寺院であったと伝えられる。境内には県指定有形文化財の「滑石刻真言」、「元享二年在銘法橋琳弁石卒都婆」があり、明星寺遺跡では中世の集石墓群が調査されている。

【参考文献】

飯塚市教育委員会　1984『赤坂遺跡』飯塚市文化財調査報告書　第8集
飯塚市教育委員会　1991『明星寺遺跡』飯塚市文化財調査報告書　第15集
飯塚市教育委員会　1993『明星寺南地区遺跡群』飯塚市文化財調査報告書　第17集
飯塚市教育委員会　1994『長畑遺跡』飯塚市文化財調査報告書　第18集
飯塚市教育委員会　1994『明星寺南地区遺跡群Ⅱ』飯塚市文化財調査報告書　第19集
貝原益軒編　1943「筑前国続風土記」『福岡県使資料　続第四輯』　福岡県
立岩遺跡調査会　1977『立岩遺蹟』
福岡県教育委員会　1983『八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告』
福岡県教育委員会　2008『彼岸原遺跡』福岡県文化財調査報告書　第216集
穂波町教育委員会　1976『スダレ遺跡』穂波町文化財調査報告書　第1集
穂波町教育委員会　1986『大門遺跡』穂波町文化財調査報告書　第2集
穂波町教育委員会　1987『上の原遺跡』穂波町文化財調査報告書　第3集
穂波町教育委員会　1989『穂波地区遺跡群　第1集』穂波町文化財調査報告書　第4集
穂波町教育委員会　1990『穂波地区遺跡群　第2集』穂波町文化財調査報告書　第5集
穂波町教育委員会　1991『穂波地区遺跡群　第3集』穂波町文化財調査報告書　第6集
穂波町教育委員会　1992『穂波地区遺跡群　第4集』穂波町文化財調査報告書　第7集
穂波町教育委員会　1995『穂波町ものがたり』
筑穂町教育委員会　1986『木下遺跡』筑穂町文化財調査報告書　第1集

第３図　調査区周辺地形図（1／5,000）

Ⅲ．調査の内容

1）遺跡の概要

本調査地点は、穂波川の支流である明星寺川と姿川に挟まれた丘陵上に位置している。調査地点の道路を挟んですぐ西に隣接して潤野小学校が所在しており、調査区内から南西方向へ隣接する敷地内は平成3年に小学校運動場拡張工事の際の第1次調査地点である。調査区は畑地として利用されてほとんど平坦となっており、現況では調査区西側は崖面で直下の水田まで急落する。しかし、その急傾斜で途切れる丘陵の端部は水田地の拡張に伴って削平されたもので、周辺地形より本来は西から東側へと続いて徐々に低くなっていく緩斜面上の立地であったと考えられる。調査区の遺構面は標高28.5m前後であり調査面積600㎡である。

調査区は調査着手前には畑地として利用されており、20cm程度の表土・耕作土を除去すると直下から遺構面が認められる状況であった。調査区は南北に細長く、南北60m程度、東西10m程度である。北半は遺構が密で赤茶褐色のローム層の基盤層で検出され、南半では遺構は希薄で北半よりも下層の基盤層にあたる礫混じりの黄茶褐色土が検出面に現れている。これらから本来調査区の南側の方が丘陵の高所にあたることが想定され、遺構の残存高から全体的に大きい削平を受けていると認識できる中で、特に南側の削平は著しいと考えられる。また、北端部の東側も水田拡張の際の影響か、大きく削られている。

検出した主な遺構は、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡3棟、土坑3基で他に多数のピットがある。土坑のうち2基は貯蔵穴と思われる。これらは全てが調査区北半に位置する。また、北半のピット等を含めた遺構の暗茶褐色主体の埋土に比べ、南半のピットの埋土は暗灰茶褐色主体とやや色調が明るく、炭細粒が含まれる。そのため、南半の遺構は当初の地形が削平を受けた後に掘削された可能性がある。

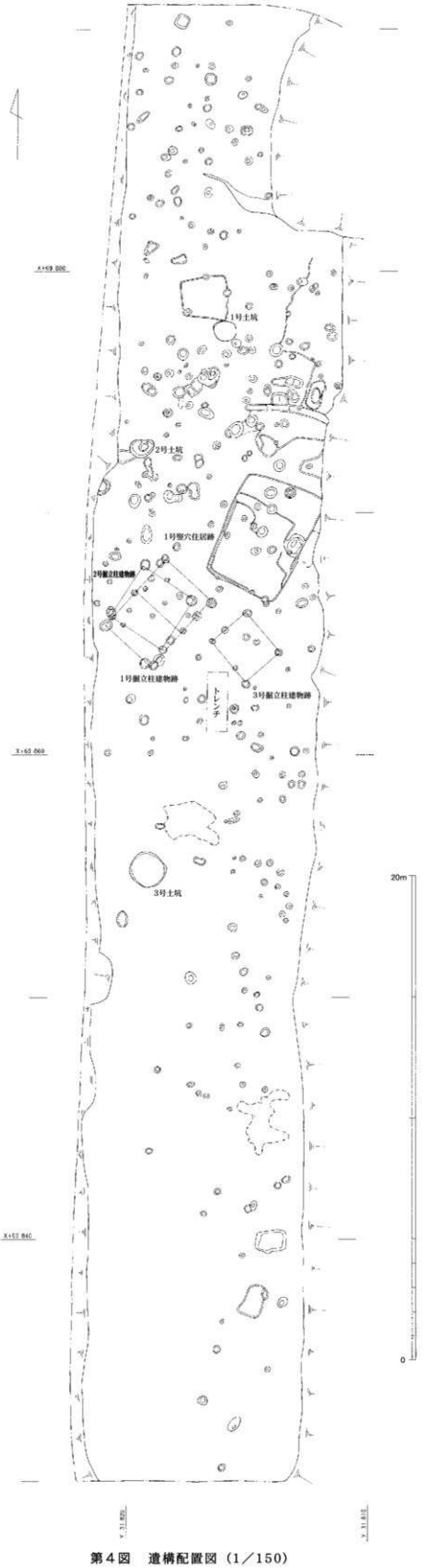
遺物は弥生土器・土師器・須恵器で、パンケース5箱分出土した。土器類は埋蔵されていた際の周辺土壌の影響によるものか、ほとんどが器表の摩滅が著しい。石器及び金属器類は出土していない。

2）竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版2、第5図）

1棟のみ検出された竪穴住居跡は、調査区中央部よりやや北側に位置する。隅丸長方形を呈し、北東隅のみ一部攪乱を受けており、他の大きな遺構との切り合いはない。埋土は暗茶褐色で、長軸4.65m程度で短軸3.4m程度である。検出面から床面までの深さは北側で20ｃｍ程度、南側では10ｃｍ程度で、床面は北側が南側よりも低い傾向にある。また東壁下の中央部付近が最も低くなっており、そこに屋内土坑が位置している。床面には段差が生じているが高低差はわずかで、ベッド状遺構との即断は難しい。南壁と西壁の周縁に壁溝が巡る部分があり、南西隅で繋がる。東壁にも段差を伴った短い壁溝が認められ、屋内土坑へと繋がっている。

床面ではいくつかのピットを検出したが、中央部付近に焼土・炭を多量に含むものが2つ（P1、P2）あり、大きな方が炉（P1）と思われる。主柱穴は2本（P3、P4）と考えられ、深さは床面よ



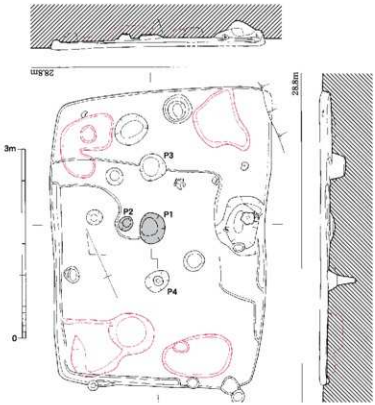
第４図　遺構配置図（1／150）

りそれぞれ26ｃｍ、46ｃｍと差がある。また、不整形な落ち込みがいくつか見られ、住居の掘形掘削に伴うもので周りの床面に合わせて貼られたものか、他遺構との切り合いによるものかは判然としない。

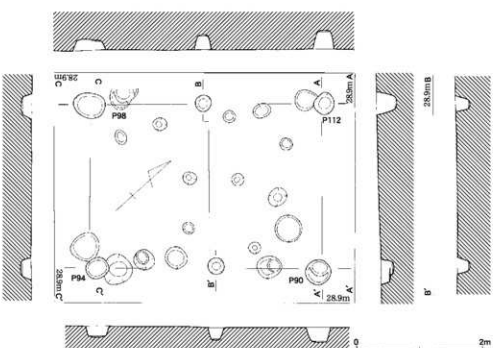
出土遺物はさほど多くなく、土師器・弥生土器が出土した。遺構の時期は、出土土器より古墳時代前期と思われる。

出土土器（図版４、第８図）

甕（1～3）　1・2は同一個体と思われる。1は頸部の締まりが強く壺の形状に近いが、畿内五様式系の甕と思われる。器表は摩滅が著しいが、内面調整にケズリが見られる。2は底部で外面ハケ調整である。3は頸部があまり締まらず、肩部はほとんど張らない。口縁部



第５図　１号竪穴住居跡実測図（1／60）



第６図　１号掘立柱建物跡実測図（1／60）

の立ち上がりは強い。器表は摩滅が著しいが、内面調整にケズリが見られる。

鉢（4・5）　4は外反口縁鉢の上半部で口径8.0cm。5は完形に復原される直口鉢で口径10.4cmである。

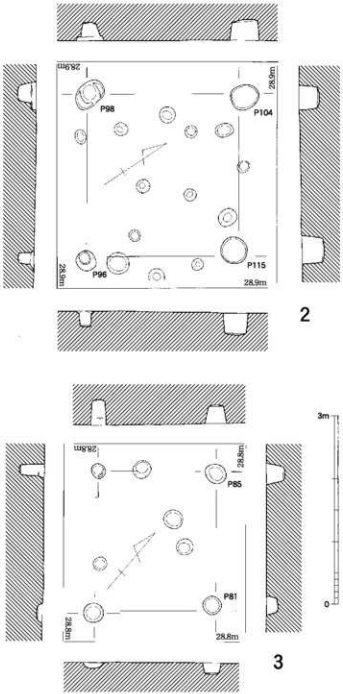
高杯（6・7）　6・7は同一個体の畿内系低脚杯である。摩滅が著しく接合できないものの、ともに残存する接合痕が見られる。口縁部は直口で、脚部に2箇所の穿孔が見られる。

その他（8～10）　8～10は混入した弥生土器である。8・9は壺の底部。これらと近い形状のものが上記の出土土器と共伴する例もあるが、残存部がわずかで特徴に乏しく判然としないため混入品とした。9は上げ底状になっているが、底部外面が剥落した可能性もある。10は甕の底部小片。

3）掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版2、第6図）

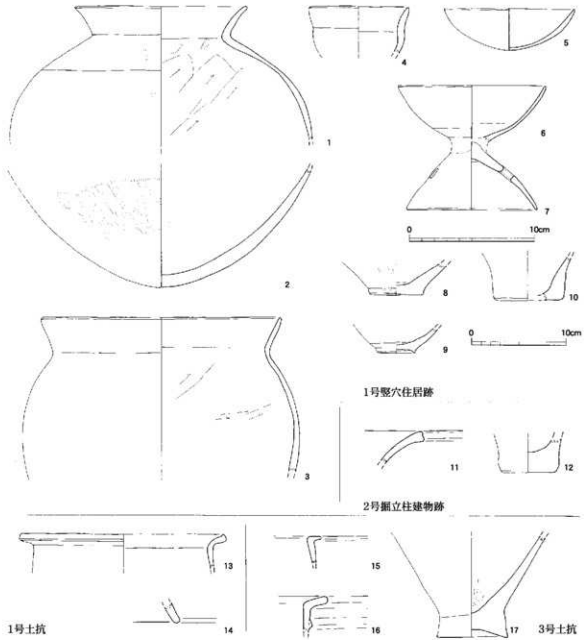
調査区中央部よりやや北側で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。周辺の多数のピットの中から相対的な位置関係のみで建物と判断したが、確実性にはやや欠ける。2号掘立柱建物跡と重複するが、遺構自体に切り合いは無く、先後関係ははっきりとはしない。桁長3.6m、梁長2.6mを測る。出土遺物は土器細片がごくわずかあるだけで、図示できるものはない。



第７図　２・３号掘立柱建物跡実測図（1／60）

2号掘立柱建物跡（図版2、第7図）

調査区中央部よりやや北側で検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。周辺の多数のピットの中から相対的な位置関係のみで建物と判断したが、確実性にはやや欠ける。1号掘立柱建物跡と重複するが、遺構自体に切り合いは無く、先後関係ははっきりとはしない。桁長2.6m、梁長2.4mを測る。



第８図　竪穴住居跡、掘立柱建物跡および土坑出土土器実測図（1～7は1／3、他は1／4）

いくらかの弥生土器が出土したが、細片が多く図示できるのは2点のみである。これらから、遺構の時期は弥生時代中期前半と考える。

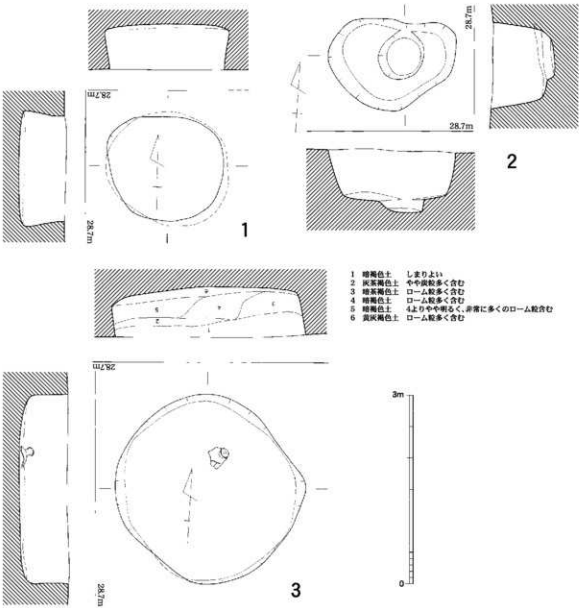
出土土器（第８図）

壺（11）　11は広口壺の口縁部小片。

甕（12）　12は甕の底部。底径は5.4cmを測る。

3号掘立柱建物跡（第７図）

調査区中央部よりやや北側で検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。周辺の多数のピット



第９図　１～３号土坑実測図（１／３０）

の中から相対的な位置関係のみで建物と判断したが、確実性にはやや欠ける。桁長2.3m、梁長1.9mを測る。出土遺物は、土器細片がごくわずかあるのみで、図示できるものはない。

4）土坑

1号土坑（図版２、第９図）

調査区北側の中央部で検出した円形の土坑である。直径は約1.6mを測る。中央部付近の最深部で深さ約0.7mである。埋土は暗茶褐色を呈し、明瞭な分層はできなかった。壁面はオーバーハングする部分が多く、貯蔵穴と考えられる。出土遺物は弥生土器がわずかで、図示できるのは2点のみである。これらから、遺構の時期は弥生時代中期前半と考える。

出土土器（第８図）

甕（13・14）　13は甕の口縁部である。口径は21.4cmを測り、口縁端部はごくわずかに跳ね上げる。14は小片で判別し難いが、上げ底気味の甕底部と判断した。

2号土坑（図版３、第９図）

調査区北側の西端で検出した不整楕円形の土坑である。長軸約2.0m、短軸約1.5mを測る。床面は中央部が周りよりも一段下がっており、その最深部で約0.95mの深さである。遺物は出土していない。

3号土坑（図版３、第９図）

調査区中央部付近で検出した円形の土坑である。大型で直径約3.0mを測る。中央部付近の最深部で深さ約0.8mである。壁面は一部オーバーハングし、ほぼ直に近い傾斜で、貯蔵穴と考えられる。平面的な規模に比べ浅く、大幅な削平を受けていると考えられる。出土遺物は弥生土器が少量で、床面から甕底部（第８図17）が倒置した状態で出土した。

出土土器（図版４、第８図）

甕（15～17）　15は口縁部小片である。口縁端部の外側への張り出しはわずかである。16は口縁部小片で、頸部の下方に突帯を有する。17は底部から胴部下位にかけて残存したもので、底径は3.6ｃｍである。

5）その他出土土器（図版４、第10図）

ここではピットや包含層などから出土した土器の説明を行う。

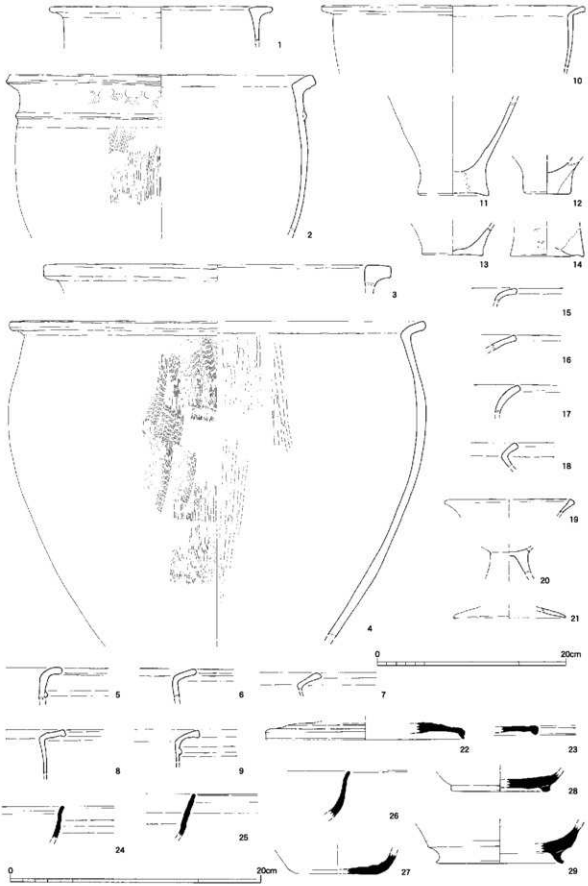
甕（1～14）　1～14は弥生土器甕である。1は三角に近い未発達なＬ字状口縁のもの。口径23.6ｃｍを測る。ピット72出土。2～10は口縁外端部が明瞭な面をなすものである。2・3は特に口縁部は厚く外端部が幅広い。2は口径32.8ｃｍでピット127出土。3は頸部の下方に一条突帯を一有す。口径36.8ｃｍでピット133出土。4は胴部上半が丸みを帯びて内傾する。内面にミガキを施す。口径44.0ｃｍでピット127出土。5～9は口縁部小片で、5・9は頸部の下位に突帯を有す。5はピット65出土、6はピット108出土、7はピット105出土、8はピット36出土、9はピット36出土。10・11は同一固体と見られ、ピット127出土。10の胴部上半は丸みを帯びず、口径28.0ｃｍを測る。11は底径7.6ｃｍ。12～14は底部小片。12はピット76出土、13はピット4出土、14はピット5出土。

壺（15～19）　15～17は広口壺の口縁部小片。15はピット19出土、16はピット36出土、17はピット76出土。18・19は、短頸壺の口縁部小片で、18はピット49出土、19はピット72出土。

高杯（20・21）　20は高杯の杯部と脚部の接合部である。ピット130出土。21は小片で判然としないが、高杯脚部の裾部と思われる。底径12.0ｃｍでピット119出土。

杯蓋（22・23）　22・23は須恵器杯蓋である。22は口径15.6ｃｍでピット51出土。23は小片でピット82出土。

杯身（24～29）　24～26は口縁部小片である。24・25は口縁端部がわずかに外反する。24はピット78出土、25・26はピット17出土。27～29は底部で、28・29は貼り付けによる高台を有する。27はピット16出土、28・29は包含層出土。



第10図　その他の出土土器実測図（1～21は1／4、他は1／3））

Ⅳ．おわりに

以上が今回の調査の結果である。調査面積は狭小で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑を検出したもののその数は少なく、遺構の大半はピットであった。また、出土遺物もわずかであるが、限られた成果の中で言及できる内容についてまとめる。

竪穴住居跡と屋内土坑

竪穴住居跡を1棟検出し、出土土器で甕の特徴からは時期を決定し難いが、小形器台から古墳時代前期と判断した。隅丸長方形を呈し、中央の炉を挟む形で2本の主柱穴を有している。

住居東壁中央部に位置する屋内土坑と壁溝について注目したい。床面に生じている段差はわずかで、ベッド状遺構とみなすかは難しいところであるが、その床面に高低差がある中で、最も低い位置に土坑が設けられており、西壁に伴う壁溝は土坑へと繋がっている。このような状況から、壁溝で屋内の高所から低所へ排水し、その水分を屋内土坑へと集める湿気抜きの機能を有していたと推測される。

近隣の弥生時代終末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡を概観する。近隣では飯塚市（旧穂波町）所在の森遺跡[1]、香塚遺跡[2]で、本遺跡とは嘉穂盆地の反対の東端に位置する飯塚市（旧頴田町）所在の鳥尾遺跡[3]や嘉麻市（旧嘉穂町）所在の穴江・塚田遺跡[4]で認められる。
明瞭な段差のベッド状遺構を伴うものが少なくはなく、森遺跡、香塚遺跡、鳥尾遺跡で認められる。穴江・塚田遺跡では本遺跡例のように床面の段差はわずかである。

周縁に壁溝を伴う例は鳥尾遺跡、穴江・塚田遺跡で認められ、鳥尾遺跡ではさらにそれが壁中央部の屋内土坑へ繋がる非常に類似した例がある。また、壁溝が伴わなくてもこの屋内土坑を設ける例は、鳥尾遺跡、森遺跡、香塚遺跡で認められる。

住居の平面形は、上記遺跡の例ではほとんどが正方形に近いが、香塚遺跡例は長方形であり、2本主柱穴の配置も近似している。

なお、三郡山地を境に西方に接する筑紫平野でも本地域に近い久山町所在の下山田遺跡[5]では壁溝と屋内土坑を伴う近似例がある。須恵町所在の牛ガ熊遺跡[6]では、はっきりとした2本主柱穴とベッド状遺構の伴う3棟のいずれもが屋内土坑も有しており、内1棟は壁溝も備える。

このように壁中央部に位置する屋内土坑は、当該期の竪穴住居跡において特殊な要素ではなく、分布範囲も非常に限られたものではないことがわかる。ただ、必ずしも壁溝が組み合うわけではないので、排水機能の蓋然性の高さや他の機能の可能性をまだまだ検討していかなければならない。

1）穂波町教育委員会　1989『穂波町遺跡群　第1集』穂波町文化財調査報告書第4集
2）穂波町教育委員会　1991『穂波町遺跡群　第3集』穂波町文化財調査報告書第6集
3）飯塚市教育委員会　2007『鳥尾遺跡Ⅱ』飯塚市文化財調査報告書第32集
4）嘉穂町教育委員会　1984『穴江・塚田遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第4集
5）久山町教育委員会　2002『下山田遺跡群』久山町文化財調査報告第8集
6）須恵町教育委員会　1993『牛ガ熊遺跡』須恵町文化財調査報告書第6集

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟検出したが、いずれも多数のピットの中から相対的な位置関係のみで建物として採り上げたものである。また、遺構の確実性を補強する他の判断要素が伴わないため、積極的な評価は避けておく。ただ、特に1・2号掘立柱建物跡は1号竪穴住居跡と主軸が近く、それぞれの時期が異なっていても、旧地形に影響された結果主軸が近くなったというひとつの可能性ある。図示できた出土遺物は、2号掘立柱建物跡の2点のみで、弥生時代中期前半と判断した。他の出土土器細片もその範疇から明らかに異なるものは見られない。

遺跡の時期と周辺地形

今回の調査で出土した遺物は、主に弥生時代中期、古墳時代前期、奈良時代である。長畑遺跡第1次調査で出土していた弥生時代前期・中期の土器に加えて本遺跡で人間活動の営まれていた新たな時期を認識することができた。また、第1次調査と共通する弥生時代の貯蔵穴や古墳時代前期の竪穴住居跡が検出され、全体数が未だ少ないながら、これらの要素が遺跡の中心的な要素となる可能性が増したと言えるだろう。丘陵上に広く展開していると想定できる本遺跡の包蔵地全体としての内容・情報をより蓄積できた調査結果であると言えよう。

また、本調査区の南側は遺構が希薄で、表土下に露出する礫混じりの基盤層の様相や貯蔵穴と思われる3号土坑の残存状況とも合わせて、大幅に削平されていることが窺える。第1次調査区の東側がその近くに位置するが、西側に比べ著しく遺構が希薄で、同様に大幅な削平が想定される。そうなると、この削平された周辺が本来旧地形において、より高所であったとみなすことができる。しかし、現在の地形ではそこからすぐに南側に落ち込むため、丘陵の周縁に向けて高まってから急落することとなる。その急激な地形の転換はやや不自然である。よってこの丘陵は、本来調査区付近ではより南側へ広がっていたが、大幅に削られて現地形のようになったと推測される。

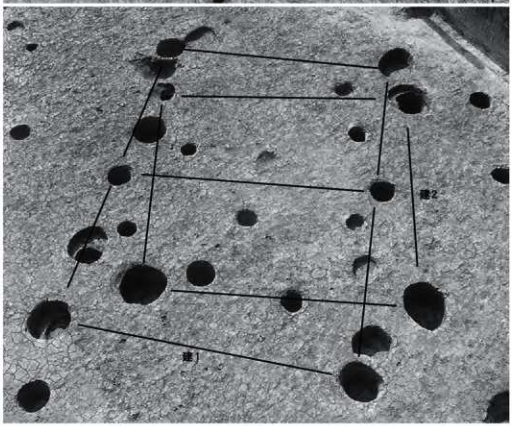
図　　版

1．長畑遺跡遠景（東から）

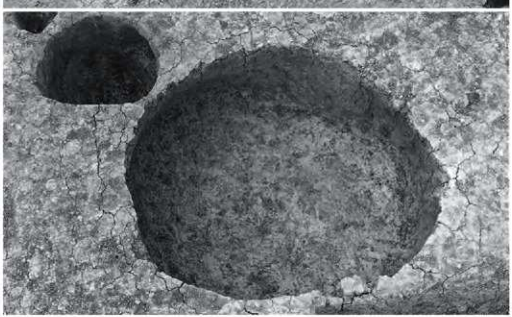
2．調査区全景（上空から）

図版 2

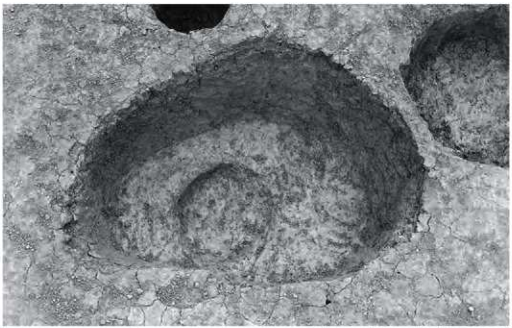
1．1号竪穴住居跡(北西から)



2．1・2号掘立柱建物跡
(北東から)

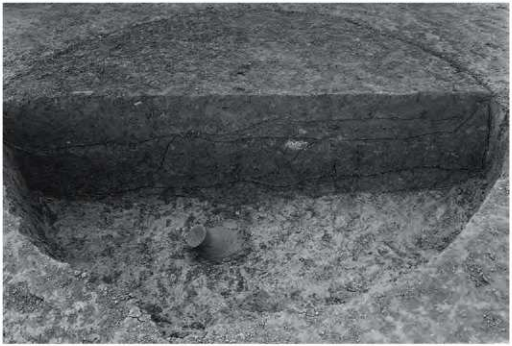


3．1号土坑(北から)



1．2号土坑（北から）

2．3号土坑（南から）



3．3号土坑土層（北から）

8図−1

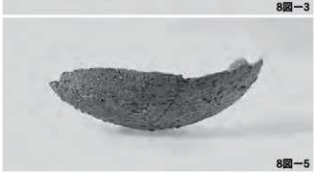
8図−7

8図−2

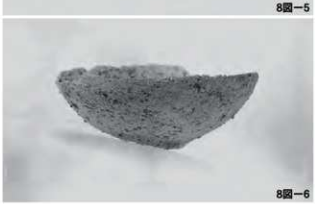
8図−8

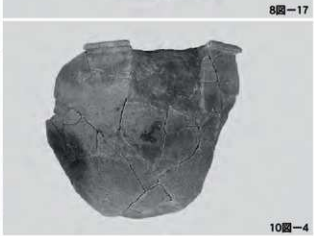
8図−3

8図−9


8図−5

8図−17


8図−6


10図−4

出土土器

報告書抄録

ふりがな	ながはたいせき
書名	長畑遺跡
副書名	潤野調節池建設事業関係埋蔵文化財調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第223集
編著者名	坂元雄紀
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡市博多区東公園７番７号
発行年月日	平成21(2009)年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
ながはたいせき だいにじちょうさ 長畑遺跡 第2次調査	いいづかし おおあざ うるの 飯塚市 大字潤野 243－1	402052		33° 37′ 46″	130° 39′ 26″	2007.10.04 ～ 2007.11.05	600	潤野調節池 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長畑遺跡 第2次調査	集落跡	弥生時代	掘立柱建物跡3棟 土坑3基	弥生土器	
		古墳時代	竪穴住居跡1棟	土師器	
		奈良時代		須恵器	

遺跡の概要：
本遺跡は丘陵上に立地し、大きく削平を受けているが、弥生時代中期の掘立柱建物跡と土坑及び古墳時代前期の竪穴住居跡を検出した。土坑には貯蔵穴が含まれる。竪穴住居跡には排水機能が想定される壁溝と屋内土坑が伴う。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2114107
登録年度 20	登録番号 9

長 畑 遺 跡

福岡県文化財調査報告書第223集

平成21年３月31日

発 行　福岡県教育委員会
〒812-8575　福岡市博多区東公園７番７号

印 刷　松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚５丁目13-40